

# 反ユダヤ主義の「克服」

バルとユダヤ人問題

相澤正己

「オーストリア理念とユダヤ系作家」というテーマで、この両者の関係を検討していく仕事を今後の研究課題にしようと考えている。オーストリア理念については、たとえば第一次大戦中にホーフマンスタールが肯定の立場から積極的な発言を行った。このいわばオーストリアの見果てぬ夢は、とりわけユダヤ系の作家たちを創作活動に駆り立てたといえる。この理念の批判者、否定者としてのクラウスやヴァイニングアの活動を含めてのことである。バルはユダヤ系ではないが、「若きウィーン」派のオルガナイザーとして多くのユダヤ系作家と交友関係にあった。彼がユダヤ人問題やオーストリア理念といかに関わったかも、上の仕事の重要な部分を形づくることになるだろう。

## 1 「現代のプロテウス」?

ヘルマン・バル (1863-1934) は、1881年にウィーン大学に入学した頃から著述活動を開始している。彼がまず熱中したのは、ドイツ・ナショナリズム運動だった。若き日にゲオルク・リッター・フォン・シェーネラーの同志であったことを、後年のバルはむしろ不名誉なことと考えていたと思われるが、これが彼を魅了した最初思想であったことは否定することのできない事実である。この時代に、彼は反ユダヤ主義にも関係する。その後のバルの履歴を簡単に辿ると、その次に彼を捉えたのはマルクス主義で、ウィーン大学を放校処分になった後入学したベルリン大学では、彼はマルクス主義者として自他ともに認めていた。このベルリン時代から次のパリ時代にかけて、彼は最初の政治ないし学問の道から、次第に文学に方向転換をしていく。これには、学位を取得できなかったことも関係している。文学では、最初はもちろんマルクス主義との関係もあり、ベルリンの新しい文学、すなわち自然主義に共感していた。ところが、パリでバルはベルリンの自然主義が本家のパリの自然主義を誤解したものすぎなかったことを「発見」し、さらにこの自然主義文学よりも、むしろ象徴主義やデカダンスの文学に夢中になってしまう。当時のバルが夢想したのは、自然主義と象徴主義の総合としての文学ということで、これを彼は、古典主義とロマン主義を総合する試みとも考えていた。

ウィーン世紀末の文学は、1890年1月、「モデルネ・ディヒトゥング(現代文学)」誌の発行とともに始まる、というのが文学史の一般的認識である。この雑誌を創刊したエドゥアルト・ミヒャエル・カフカ (1868-93) は、ベルリン流の自然主義による新しい文学をウィーンでも興そうとしてこの雑誌を計画し、そういう文脈でバルにも参加を呼びかけた。ウィーンに戻って来たバルは、ところが、自然主義なんてものはもう駄目なんだと言い

出して、このカフカを大いに驚かせる。ドイツ自然主義を代表するハウプトマンの作品がようやく発表され始めたこの頃に、バルはすでに『自然主義の克服』という本を出すわけで、これは彼の先見性を示すというよりも、むしろ彼の軽薄さを示すと受けとられることが多い。しかし、そこにある種々の先見性を見ることは可能であり、また、バルの批評家ないし新しい文学運動のイデオログとしての才能は、決して否定できないだろう。

ウィーンでバルはシュニッツラーと、そして誰よりもロリスというひとりの天才少年を「発見」する。ヨーロッパを股にかけて新しい文学活動を展開しようとしていたバルがウィーンを拠点とする決心をした唯一の理由は、このホーフマンスタールの存在にあったと、バル自身が書いている。

いわゆる「若きウィーン」派の文学は、印象主義ないし新象徴主義、あるいは新ロマン主義と呼ばれる。それは、シュニッツラー、ホーフマンスタール、ベーア＝ホーフマン、ザルテン、アルテンベルクといった人々の資質と、ドイツとは異なったウィーンの文化風土によるものであったと同時に、イデオログないしオルガナイザーとしてのバルによって方向づけられたものであったといわなければならない。ベルリンやパリばかりでなく、ロシアやスペインにも滞在して全ヨーロッパ的な視野を持ち、様々な新思潮との対決も行って来たバルが存在することで、むしろウィーンの伝統的な文化風土とも結びついた新しいウィーンの文学が誕生したといえる。その意味でバルの存在は重要であったし、この時代のウィーンを代表する批評家・劇作家となっていくクラウスも、バルとの対決から出発をするのである。

バルの批評家としての原則は、とりあえず新しいものの側につく、ということだったといえるのではないだろうか。クリムトを中心とする分離派が保守派から攻撃されたとき、バルはクリムト擁護の論陣を張った。マーラーやシェーンベルクの音楽も積極的に評価しようとした。20世紀に入ると、表現主義にも肯定的な反応をした。しかし、彼が前衛だったといえるのかどうかは、実はよくわからない。20世紀に入ってから、彼は盲腸炎の手術をシュニッツラーの弟から受けた結果が悪く、ほとんど死ぬかもしれないという体験をする。さらに、アンナ・ミルデンブルクと2度目の結婚をしたあたりから、カトリックへの回帰という傾向を示し始める。これは芸術においては、オーストリア・バロックの精神への回帰ということであった。同じような傾向は、ホーフマンスタールにも見られるといえる。ザルツブルクのフェストシュピレは、1920年から21年にかけて、ホーフマンスタールがR.シュトラウスやM.ラインハルトとともに始めた事業だが、この事業を20世紀の初めに最初に構想したのはバルだった。その理念は、オーストリアからバイエルンにかけてのドイツ・カトリック圏の中心に位置し、同時にモーツァルト生誕の地でもあったザルツブルクで開催される祝祭によって、カトリック文化の伝統の復興を目ざす、ということだった。このバルやホーフマンスタールの理念に真っ向から敵対したのは、もちろんクラウスである。クラウスが、いったん入信したカトリック教会から再び離脱するのは、ホーフマンスタールの『ザルツブルク大世界劇場』が教会での上演を許可されたことに激怒してのこと、と伝えられている。

バルは、批評家として文学や美術の評論を書いただけでなく、小説や戯曲も書いて、生涯に百冊を越える本を出した。しかし、作品よりも人物としての方が価値があるという言い方が、すでに生前からなされていたようで、これはバル自身にとっては、当然のことながらあまり喜ばしい評価ではなかった。「現代のプロテウス」というようなあだ名も、どちらかといえば否定的なものといえるだろう。確かに彼は次々と新しい思想を追い求めたわけで、それを「無節操」「軽薄」とする見方もありうるだろう。しかしながら、この「軽さ」をオーストリア的特性のひとつとして、むしろ肯定的に評価することもできるのではないかと、とも思う。このオーストリア的特性に関わるオーストリア理念については、ここでは、超民族性という共通基盤の上に築かれた、しかしまことに曖昧模糊とした理念というに留めるが、この理念に関わってヘルマン・バルが何とも興味深い存在のひとりであったことは確かであるし、それはユダヤ人問題との関わりにおいても同様なのである。

## 2 ユダヤ人問題

ドイツ語の Antisemitismus という言葉は大変新しい言葉で、1880 年前後に造られたといわれている。1882 年、19 歳のウィーン大学生バルが反ユダヤ主義にかぶれたのも、新思想にすぐ飛びつく性向の現れだったともいえるだろう。しかし、だからといって、彼がその後も生涯にわたって反ユダヤ主義者であったといわれるのは、いかにも気の毒だ。第二次大戦後、バル研究に大きな役割を果たしたウィーン大学教授のキンダーマンがかつてナチズムの同調者であったことも、この点でバルにマイナスの作用を及ぼしているかもしれない。ヨーゼフ・ロートも、ウィーン大学生であった時に当時まだ助手であったキンダーマンと、ある種複雑な関係にあったと伝えられる。反対に、バルの敵手であったクラウスは、シュニッツラーをはじめとする一群のユダヤ系文学者の「首領」として、「ヘルマン・バル・コホバ」(バル・コホバないしバル・コクバは、ローマ帝国に対する第二次ユダヤ叛乱の指導者)というあだ名をバルに与えていた。クラウスの意図はもちろん揶揄にあったわけだが、考えようによってはこれは名誉ある呼び名ともいえるだろう。同じような文脈で、バル自身がユダヤ人だと見なされたこともあるらしい。

もちろん、バル自身はユダヤ系ではなかった。しかし、彼は生涯にわたってユダヤ人問題と深く関わり続けている。確かに、若い頃に一時期反ユダヤ主義に傾いたことがあるのだが、その後この立場を離れてからは、終始一貫して反ユダヤ主義に反対し続けたといえる。いくつかの点で若干矛盾する言動があるとはいえ、彼の好んだ「克服」という言葉を使えば、一貫して反ユダヤ主義を克服する努力を行い、したがって彼の最晩年に抬頭したナチズムに屈することもなかったことを、バルの名誉のために、まず確認しておきたい。

1881 年 10 月、ウィーン大学に入学したバルは、図書委員会の活動などを通じてドイツ・ナショナリズムにひかれ、クリスマスには文学部から法学部に転じ、また、全ドイツ主義 (alldeutsch) の学生組合アルビアに加入する。ここでバルは、同じアルビアのメンバーだったテオドール・ヘルツル、パウル・フォン・ポルトハイムなどと知り合う。ドイ

ツ・ナショナリズム運動の先達として、ゲオルク・シェーネラーやエンゲルベルト・ペルナーシュトルファー、ハインリヒ・フリートユングなどとも知り合うことになる。ヴィクトール・アードラーも、当時はこの運動の有力なメンバーだったわけで、この頃に出会っている筈なのだが、パールはアードラーとの出会いは後のベルリン時代だと主張している。

オーストリアのドイツ・ナショナリズム運動は、本来は必ずしも反ユダヤ主義的ではなく、82年9月のリンツ綱領にも反ユダヤ主義条項はなかった。事実アードラーやフリートユングのような指導的なメンバーがユダヤ系であったわけだが、シェーネラーは、このリンツ綱領の頃から反ユダヤ主義、それも先程述べた Antisemitismus という新しい言葉で呼ばれた人種論的な反ユダヤ主義の傾向を強める。このときにパールはこの傾向に加担する行動をして、それが後々まで彼が反ユダヤ主義者と誤解される原因となった。ウィーンの町中に反ユダヤ的なスローガンを書いたビラを貼って歩くというようなことも行ったようだが、何よりも問題にすべきことは、ドイツ・ナショナリズム運動の機関紙的な新聞のひとつであった「リンツ日曜新聞」(Linzer Sonntagsblatt) に、反ユダヤ主義的な論説を連載したことだった。これには、Kieselaß (「砂利食い」?) という奇妙な筆名が記されているだけで、パールという署名はないが、この筆者はパールであると考えられている。

„Freie Gedanken“ (「自由思想」) というタイトルをもつ欄での連載が開始されたのは1882年9月24日(日)である。実はこの日にはリンツでドイツ・ナショナリストの大会が予定され、そこで上の綱領が採択されることになっていた。この大会は当局から禁止されてしまうのだが、パールの論説がこの大会に合わせて発表されたということは、十分に考えられる。

「ドイツの男性諸君！」という呼びかけで始まるこの論説は、この呼びかけのようにドイツ・ナショナリズムの熱情溢る文章で、オーストリア社会がいかにユダヤ人によって「侵食」されているかを数字を挙げて示しながら、その排除を主張するものだった。後のアドルフ・ヒトラーの主張などと比較すれば穏やかなものであったとしても、パールの論説はシェーネラーの反ユダヤ主義に直結するものだったし、立場は異なるとはいえ、キリスト教社会党のカール・ルエガーの政治的デマゴギーにも通じ、最終的にはナチズムにもつながっていくものであったことは否定できない。

1882年から83年にかけて、オーストリアのドイツ・ナショナリズム運動は反ユダヤ主義の是非をめぐる大きな転換期を迎える。19歳のパールは、その中で反ユダヤ主義勢力の側に立って、かなり重要な役割を果たしてしまったと言わざるをえないだろう。簡単に言ってしまうと、この転換期にこの運動はもっとも上質なメンバーを排除して、いわば滓ばかりを残してしまったと言わざるをえない。アードラーが去り、フリートユングが去り、ヘルツルが去った。彼らはユダヤ人であったために排除されたわけだが、シェーネラー一派と決別したのはユダヤ人ばかりではなかった。「リンツ日曜新聞」と並ぶ機関紙的な新聞であった「ドイチェ・ヴォルテ(ドイツの言葉)」の編集主幹ペルナーシュトルファーも、「リンツ日曜新聞」のキルシュマイヤーも、シェーネラーの反ユダヤ主義に反対して袂を分かった。ペルナーシュトルファーに対抗して、シェーネラー一派は83年7月から「ウン

フェアフェルシュテ・ドイチェ・ヴォルテ(正真正銘のドイツの言葉)」を発行し始めるが、これはもう単なる反ユダヤ主義新聞としかいいようのない代物であった。

バルが反ユダヤ主義に同調してしまったことに関して、ひとつ弁護できることがあるとすれば、ウィーン大学に入学するまで、彼にはユダヤ人の知己がなかったということがある。ウィーンに出て来たバルは、たとえば義理の叔父で歯科医をやっていたロピチュクという人のところに入りを始める。ユダヤ人であったこの人は、シェネラーが悪意をもって描くようなユダヤ人とは全く似ても似つかない、立派な人物だったと後にバルは書いている。バルには、何といても人物を見抜く力はあった筈で、アードラーやヘルツルを排除するような運動に、そういつまでも無批判ではいらなかっただろう。

学生組合アルピアも反ユダヤ主義的傾向を強めた。ポルトハイムは、ユダヤ人学生は新たに加入することは許されないが現メンバーは留まることができる、という妥協案を提出して拒絶され、83年3月、ヘルツルは名誉ある退会を求めたものの、この申し出も拒否され、ユダヤ人学生は全員まとめて除名という処置を受ける。ポルトハイムは、その後自殺をした。

83年3月、ウィーン大学の学生組合は、合同でリヒャルト・ワグナーの追悼集会を催した。これは大荒れの集会となり、反ユダヤ主義的な言辞も飛び交ったようで、ヘルツルが退会を申し出たのもそのことに怒ったからだといわれている。この集会で、バルはドイツ・ナショナリストとしてのワグナーの政治思想を賛美するアジ演説を行い、それが大学当局の逆鱗に触れ、放校処分を受けてしまった。バルが反ユダヤ主義の演説を行ったのならば、このような厳しい処分はなかっただろうといわれており、当時のオーストリア支配層にとっては、ドイツ・ナショナリズムは危険思想であっても、反ユダヤ主義は必ずしもそうではなかったのである。

ヘルツルは、その後ジャーナリストになり、さらにシオニズム運動のイデオログにしてオルガナイザーとなるが、ヘルツルとバルは、1904年のヘルツルの早い死に至るまで、親しい関係を保った。ヘルツルを通じて、バルはシオニズムやユダヤ人問題について理解を深めたといえる。一方、ヘルツルも同時に文学者としての野心を持ち続けた人で、バルの日記によれば、死ぬ直前まで自分の作品の価値を気にかけていたという。

アードラーとも、バルは終生にわたって親しく交際している。全ドイツ主義のナショナリストでビスマルクの賛美者がマルクス主義者に転身したという意味で、この両者には共通するところがあった。1887年から88年にかけて、ベルリンからウィーンに戻って1年間の兵役についていたときに、バルはアードラーの「グライヒハイト(平等)」に協力する。バルの能力を評価したアードラーは彼をこの機関紙の編集者にしようとするが、カウツキーが、バルはまだ若すぎるといって反対したと伝えられている。カウツキーは確かな目を持っていたというべきかもしれない。1889年、インターナショナルの会議に出席すべくパリを訪れたアードラーは、前年の11月からパリに滞在していたバルと再会し、愕然とする。半年前の政治青年が象徴派、デカダンスの文学青年に、マルクス主義者が熱烈な唯心論者に変身していたからだ。

しかし、それを限りとして両者が決裂することにはならなかった。パールはアードラーの家庭の雰囲気を楽しみ、ある作品をアードラーの夫人に捧げているほどで、立場は異なっても両者の親密な関係は続いたのである。ユダヤ人問題に関しても、パールはアードラーの影響を受けている。アードラーは、ある時パールに、反ユダヤ主義者である権利をもつのは自らユダヤ人である人間だけだ、そうでなければ、そんなものは意味のないおしゃべりにすぎない、ということ述べた、と伝えられる。この言葉は、パールに強い印象を与えたいらしい。

1890年の2度目のベルリン滞在中も、ユダヤ人についてパールの認識を深めさせるものとなった。かつて、自分がいわゆる講壇社会主義の泰斗アドルフ・ワグナーの下で経済学を学んでいた頃とは異なって、ベルリンが近代の物質主義に冒され、過去を振り捨ててひたすら未来へ向かおうとしている姿を見たパールは、かつてのベルリンの精神が、ユダヤ人、それもとりわけユダヤ人女性の間だけに生き残っているのを発見する。このユダヤ人たちの中からこそ、ワルター・ラーテナウやフリッツ・マウトナーやエルンスト・カッシーラーが生まれたのだ、とパールは書いている。

ベルリンのユダヤ人についてドイツの文化伝統とのつながりを称賛したパールは、オーストリアのユダヤ人については、これと矛盾することを述べている。ユダヤ人がオーストリアの文化伝統にこだわるのは滑稽で、むしろユダヤ人は伝統とのつながりをもたないからこそ、新しい状況に適応すべくオーストリア人に助力するべきだというのだ。1911年に、パールはプラハのユダヤ人学生に招待されて「オーストリアのユダヤ人」と題する講演を行っている。このこと自体、彼が当時のユダヤ系知識人からどのように見られていたかを示すものだが、この講演でも、ユダヤ人こそヨーロッパの過去などに囚われず、積極的に新しい世界を築いて行くべきだと述べている。若き日に急進派であったということは、こういうところに残り火のように姿を現すものなのかもしれない。

20世紀に入ってから言動に触れてしまったが、19世紀末のパールについて、さらに2つのことを是非問題にしておかなければならない。ひとつは『反ユダヤ主義』という著書、もうひとつはユダヤ系の女優との結婚である。

1893年、ドレフュス事件の起こる前年に、パールはヨーロッパ中の指導的な人々に反ユダヤ主義についてインタビューする試みを行う。これは何よりもパールの交友範囲の広さを物語ることで、ベーベル、モムゼン、ハルデン、ドーデ、ロシュフォール、バルフォア、イブセンというような人々が彼のインタビューに応じている。この記録は、まずウィーンで「ドイツ新聞」に掲載され、翌94年に『反ユダヤ主義』と題して出版された。序文の中でパールは、このインタビューの結果は後世にとって「1893年頃の精神の状態についての一風変わったドキュメントとなるかもしれない」、と述べている。さらにパールは、反ユダヤ主義の自己目的性を指摘し、「反ユダヤ主義者は、反ユダヤ主義者であるために反ユダヤ主義者なのだ。この感情にこそ身を委ねている。荒廃し衰微した神経を整備するために人工的刺激が求められるのは、時代に原因がある。今や大衆から失われてしまった信仰や消え去った様々な理想は、かつては好ましい陶酔を与えてくれたものだった。この陶酔を、

人工の刺激で代用しようというのだ。金持ちはモルヒネやハシッシュを頼りにする。そんな余裕のない者は、反ユダヤ主義者になる。反ユダヤ主義は、貧乏人に許されたモルヒネ中毒である」と書いている。そして、反ユダヤ主義を治療できる唯一の可能性は、同じような感情を引き起こす何かプラスの価値のものでこれを置き換えることだと述べて、社会主義だけがその医師であるのかもしれない、と書く。「若きウィーン」派の中心人物は、決して社会主義を捨ててしまったわけではないのである。

さらに翌年の1895年、パールはロザリーエ・ヨークルという若い女優と結婚をする。彼女はユダヤ人であったために、カトリック教徒であったパールは無宗派の宣言をしなければならなかった。したがって、この結婚にはパールの両親が大反対をした。幸福な幾年かをすごした後、2人の関係は次第に冷めたものになっていったようで、1909年にはついに離婚をしてしまう。その間にパールは、いってみれば不倫ということなのだが、ワーグナーの楽劇に登場したアンナ・ミルデンブルクに夢中になってしまい、ロザリーエとの離婚後、彼女と再婚する。そして、無宗派の宣言をしていたパールがカトリックに復帰したばかりか、もっと積極的にカトリックの世界に関係していくことになる。しかし、1895年の結婚は、すでにこの時、パールがかつての反ユダヤ主義的な偏見を克服していたことを証明しているといっただろう。96年には、彼はある反ユダヤ主義者と決闘をしようとして、父親からかつて反ユダヤ主義者だったことをからかわれた、というエピソードも残っている。パールの血の気の多さを物語るエピソードでもある。

「ノイエ・フライエ・プレッセ」のパリ特派員としてドレフュス事件と遭遇し、ウィーンに戻って来たヘルツルと、パールはよく散歩をしながら語り合っていたと伝えられている。当然のことながら、ユダヤ人問題とシオニズムが話題の中心だっただろう。何にせよ積極性を重んじたパールは、たとえばシュニッツラーの作品に登場するような諦観に満たされた受動的な人物を理解することができず、その意味で、ユダヤ人のアイデンティティを強調するヘルツルのシオニズムを彼は高く評価した。後期のパールのバロック的な世界観からしても、同化のみを志向するユダヤ人は不可解な存在であったといえるだろう。バロック的な世界観とは、対立物の一致による世界の調和という考え方で、同質性ではなくむしろ異質なものの共存によってこそ世界の調和は図られるべきだという思想である。パールは、ひとつの国民がひとつの純粋な要素だけから成り立つべきだという考えにも反対をしていた。純粋な人種という概念も彼は否定し、様々な異質な要素が混ざり合うことによってこそ国民は強化される、と考えていた。若き日にビスマルクの賛美者であったパールは、当のビスマルクの顧問官からオーストリアのもつ独自の意味と可能性について論じられたことがある、という思い出を自伝に書いている。異質な要素を排除することによって国民はかえって弱体化するという彼の思想は、すぐれてオーストリア的ないしバロック的な思想といえるだろうし、ここにオーストリア理念との肯定的な関係も胚胎するといえるだろう。

ところで、このオーストリア的ないしバロック的な考え方からして当然のことともいえるのだが、ユダヤ人に故国をもつという感情を再び与えたヘルツルの功績を評価する一方で、オーストリアやドイツのユダヤ人がパレスチナに移住すべきであるとは、パールは全

く考えなかった。故国があるということでユダヤ人がユダヤ人としての誇りをもつだけで十分なのであり、そういうユダヤ人がオーストリア国民であり続けることこそ望ましい、とバルは考えた。

しかしながら、1912年のあるエッセイの中では、彼はユダヤ国家の樹立を強く弁護している。シュニッツラーは、ユダヤ人問題との直接的な対決を行った長編小説『自由な世界への道』を1908年に発表し、その中で、主要人物のひとりであるシオニストの青年に、ユダヤ国家は同化した一部のユダヤ人のためではなく、ユダヤ人大衆のためにこそ必要なのだ、と言わせている。これとよく似た主張をバルは行っているわけで、そこにはシュニッツラーの小説の影響もあったかもしれない。もちろん、シュニッツラー自身はシオニズムに対しても懐疑的であったのだが。

ところが、1919年に発表した小説『コラの一党』では、バルはパレスチナ帰還というシオニズムの計画に再び反対をしている。これはシュニッツラーの『自由な世界への道』と同じく、バルがユダヤ人問題との対決を行った作品で、彼の最上の小説作品という評価もある。主人公である若い貴族の将校が、自分は実はユダヤ系であったことを知るといふのだが、この主人公を通してバルが示したのは、洗礼を受けることで同化し、さらに土地を取得して住み着くことでオーストリアやドイツへの帰属を確実なものにしながら、その一方でユダヤ人としての独自のアイデンティティは保持する、という道だった。しかし、先程触れた1911年のプラハでの講演では、彼はユダヤ人の受洗による同化に否定的な発言をしており、こういう点では、確かに矛盾が見られると言わざるをえない。

この他に問題にすべきこととしては、ドイツ出身ながら「若きウィーン」派の一員とも見なされていたヤーコブ・ヴァサーマンの「ドイツ人にしてユダヤ人」という生き方にバルは否定的だったということや、反対にマルティン・ブーバーに対しては高い評価を行っていた、というようなことがある。最後に、1932年、ナチ前夜に行われたユダヤ人についてのあるアンケート調査に対するバルの回答に触れておかなければならない。このアンケートの結果は、『ユダヤが悪い…？ ユダヤ人問題についての討議の書』と題されて出版された。そこでバルは、自分の古くからの友人であったシュニッツラー、ベアー＝ホーフマン、ザルテン、ホーフマンスタールがユダヤ人であったことを力説して、ユダヤ人が劣等な人間であるという考えに強い調子で反論している。「このような果実を实らせる人種を劣等などと言うことは、できることではない」というのである。

先程触れたシュニッツラーの小説には、貴族階級に属する音楽家志望の青年と、ユダヤ系の青年作家が登場し、ユダヤ人問題について様々な対話を行う。ユダヤ系の作家は、貴族の青年のこの問題を理解しようとする熱意と善意を認めながらも、問題の本当の複雑さを伝えることは不可能だと考える。バルのユダヤ人問題との関わり方にも、この貴族の青年に通じるところが否定できないかもしれない。しかしながら、19世紀末から20世紀にかけて、この問題がますます先鋭化し、ついにあの破局を迎える時代にあって、若き日の反ユダヤ主義を「克服」しようとしたバルの努力は、現在なお注目するに値するといえるのではないだろうか。

(1993年11月)

## 【参照書目】

- Botstein, Leon, *Judentum und Modernität*, Wien 1991.
- Bronsen, David, *Joseph Roth. Eine Biographie*, Köln 1974.
- Daviau, Donald G., *Der Mann von Übermorgen. Hermann Bahr 1863-1934*, Wien 1984.
- Daviau, Donald G., *Hermann Bahr und der Antisemitismus, Zionismus und die Judenfrage*. In: *Literatur und Kritik*, Nr.221 / 222(1988), S.21-41.
- Farkas, Reinhard, *Hermann Bahr. Prophet der Moderne*, Wien 1987.
- Heer, Friedrich, *Gottes erste Liebe*, Frankfurt / M. 1986.
- Rieckmann, Jens, *Aufbruch in die Moderne*, Königstein 1985.
- Wunberg, Gotthart(Hg.), *Das Junge Wien*, Tübingen 1976.
- Wunberg, Gotthart(Hg.), *Die Wiener Moderne*, Stuttgart 1981.
- Zohn, Harry, »... ich bin ein Sohn der deutschen Sprache nur ...«, Wien 1886.